

トランスナショナル社会空間における

結節点としてのバスク・ホテル

— ベーカーズフィールドとボイジーの事例 —

石井久生

1. はじめに

アメリカ合衆国のバスク系住民はその数約5万である。日系の約80万と比較すると、バスク系がいかに少数であるかが理解できる^①。バスク系住民はアメリカ合衆国西部諸州に集中するものの、数的にはマイノリティの中でも際立ったマイノリティであるため、華人のチャイナタウンのような集住地区すなわちエスニック・エンクレイブを形成することはなく、その存在を実感できる場所や機会は限られる。

それにもかかわらず、それらの場所や機会における彼らの存在感は他のエスニック・グループにひけをとらない。その場所のひとつが、アメリカ合衆国西部の主要都市を中心に設置されたバスク・センターである。バスク・センターは、ヨーロッパのバスク地方から新大陸に移住したバスク人の相互扶助やバスク文化の継承を目的に19世紀末ごろから設置された機関である。バスク語でエウスカル・エチェア Euskal Etxea (バスク語で「バスクの家」の意)といわれるように、バスク・センターは故地を離れたバスク人にとっては家のような存在であった。現在、各地のバスク・センターはバスク系住民の社交場のような機能を担っており、週末には近隣のバスク系住民が集合し、バスク地方独特のカードゲームであるムス Mus に興じたり、バスク風の食事会を開催したりしている。社交場としての機能以外に、バスク語やバスク舞踊などのバスク文化教室も開設されることで文化継承機能も担っている。

バスク系住民の連携強化は、社交面や文化面に限られた現象ではなく、経済分野でも確認できる。そもそもバスク人は、経済的成功を夢見てアメリカ合衆国西部に19世紀後半以降移住するようになったが、彼らの就業分野は主に羊飼いであった。羊飼いとして数年間就業し、蓄財後にバスク地方に戻るとというのが、彼らの典型的就業パターンであったが、一部の定住したバスク人は牧羊業に参入して成功を収め、現在では西部の牧羊業経営者の多くをバスク人が占めている。バスク系牧羊企業家は牧羊業界にバスク系のビジネス・ネットワークを構築し、各地の羊毛組合の要職を占有している。アメリカ合衆国西部に定住ようになったバスク系住民が文化的・経済的ネットワークを構築し連携を深めることで、バスクのエスニシティのもとに彼らのコミュニティが強化される様子は、バスクの「再ナショナル化」と

もいえる現象である。

アメリカ合衆国西部におけるバスクの再ナショナル化は、バスク・センターやバスク系牧羊企業のようなバスク系住民や移民が集う磁場、あるいは結節点を起点に進行した。そのような点でもうひとつ忘れてはならない磁場がバスク・ホテルである。バスク・ホテルは19世紀後半から1970年代にかけてアメリカ合衆国西部の都市部に集中立地した。バスク・ホテルはバスク人が移民として入国後に目指す最初の目的地であり、目的地到着後に現地社会と最初に接触する活動拠点であった。

バスク人が地縁や血縁を頼りに移住する行動を石井（2014）が明らかにしたが、同様にバスク・ホテルの経営者も地縁や血縁に基づく独特なネットワークを形成した。そしてそのネットワークは、移民の故地であるバスク地方と移住先であるアメリカ合衆国西部を連動するヒトと情報の移動のための特殊なネットワークを形成した。その移住先の拠点となり、移住先と故地を結ぶ結節点となったのが、バスク・ホテルであった。

バスク・ホテルを結節点とするヒトや情報のネットワークは、各地で独特の展開を呈した。ある都市のバスク・ホテル集中地区では、移民減少後の都市再開発にバスク系住民が深く関与することで、バスクのエスニシティの存在を十分に認識できるような都市景観が創出され、故地バスク地方とのネットワークがさらに強化されている。また他の都市では、バスク・ホテルの機能低下とともにバスクのエスニシティが景観において次第に不可視化し、バスクのプレゼンスはかつて繁栄の陰に埋もれつつある。

本論では、そのような対照的な状況にある2つの都市のバスク・ホテル集中地区を取り上げ、それが形成される過程を概観し、そこを舞台にバスクのエスニシティがいかに生産され強化され、あるいは衰退するかを検証する。そのうえで、バスク地方とアメリカ合衆国西部を結ぶためにバスク人が実践した様々な社会的行為により生産された社会空間の具体像を、その空間においてバスク・ホテルが果たす役割から明らかにすることを目的とする。

2. バスク・ホテルがつなぐバスク地方とアメリカ合衆国西部

移民にとって同郷出身者が経営するホテルいわゆるエスニック・ホテルは、移住先到着後最初に宿泊する施設であり、移住先の現地社会への窓口になると同時に、故郷とのつながりを確認できる郷愁的な場所でもあった。さらに移民はエスニック・ホテルに対し、両替所、通訳など現地社会適応のための様々な機能を求め、ホテル経営者もそれに応じるようにサービスを提供した。このようにエスニック・ホテルは移民の現地ホスト社会への適応、ホテル経営者のエスニック・ビジネス戦略をとおしてエスニック社会とホスト社会の交渉が観察される絶好の場所であったため、エスニック研究に関わる様々な分野において研究対象となってきた。

エスニック・ホテルを移動の結節点と定義するなら、故地と移住先の関係性から考えるこ

とも可能になる。その点で関係性を重視する「ディアスポラ」は、エスニック・ホテルを研究するうえでキーワードとなる。アメリカ合衆国西部のバスク・ホテルを扱った Echeverria (1999) や Totoricaguena (2005) は基本的にディアスポラ研究の立場をとっている。日本におけるエスニック・ホテル研究もディアスポラ研究の影響が強くみられる。例えば飯田 (2006, 2007) は、ホノルルにおいて日系人が経営した日本旅館を対象とした研究で、日本旅館が日系人入植時に果たした機能を検証し、日本旅館が単に宿泊施設としての役割のみならず日系人の現地社会への適応のための様々な機能を提供していた様子を明らかにしている。飯田の研究は「ディアスポラ」という用語が登場しないが、移民の現地社会への適応を故国日本との関係性から論じていることから、ディアスポラ研究的要素が強い。

飯田 (2007) はひとつ興味深い現象に言及している。それは、戦後、日本旅館経営者が現地日系人を募集して日本への観光団と称するツアーを組織化していたということである。日本旅館は現地での受け入れ機能のみでなく、一時的帰郷ツアーといえども還流的移動にも関与していたのである。ホノルルと日本という物理的に離れた2つの地域が、移住という一方向的移動のみでなく双方向的移動によっても繋がれていたということになる。

その点で、1950年代の横浜とホノルルをめぐる双方向的移動についての藤原 (2011, 2012) の論考が示唆するところは興味深い。それによれば、明治期から第二次世界大戦前まで続いたホノルルと横浜の間のヒトの移動の結節点となったのは、横浜の移民宿とホノルルの日本人旅館であった。戦後移民は減少するが、戦前に確立された経路を利用して観光団による移民宿と日本人旅館をめぐるヒトの移動が維持された。越境する移動の記憶が、それに関わる人々の記憶を多重的なものにし、これらの人々の場所との結びつき方やアイデンティティが複雑に交差する。そのような場所を藤原 (2012) は「回路的世界」と呼んでいる。

回路的世界の考え方は、広田 (2013) のいう「トランスナショナル・コミュニティ」に通じるものがある。広田は、移民がその出身地と定住地の社会を連動する複雑に交差した社会関係を育みながらそれを維持する諸過程をトランスナショナル・コミュニティと定義し、具体的な「場所」に立脚しながらトランスナショナル・コミュニティを研究する枠組みの構築を試みている。その際に広田は、移動の拠点となる場所に注目し、トランスナショナル・コミュニティにおける越境の「磁場」となる場所には、他集団との交渉、場所や空間を求める競争などが観察されるとしている。

アメリカ合衆国西部に移住したバスク人の場合、磁場あるいは結節点となる場所が西部諸都市に形成されたバスク・ホテルの集中する地区である。アメリカ合衆国西部諸都市にニューヨークから大陸横断鉄道を利用して到着したバスク系移民にとって、最初の目的地がバスク・ホテルであった。当時のバスク系移民の多くはバスク語を母語とする男性単身者であり、英語を理解しなかった。そのため入国当初の避難所的施設が必要であったが、その役割を担ったのがバスク・ホテルであった。バスク・ホテルでは、ホテル経営者がバスク人であり、従業員のメイド、料理人、給仕もバスク地方出身者であったため、故郷の言語でコミュニケー

ションができた。長距離移牧に従事中のバスク系羊飼いにしても、バスク・ホテルは避難所であった。羊飼いは1人あるいは2人で数千頭の羊をとめない大回遊路上の放牧地で長期間を過ごした。そのため現地のホスト社会と接する機会はほとんどなく、英語を習得しなかった。長距離移牧中に唯一労働から解放されるのが冬季であった。その時期の羊群は子羊出産期にあたり、羊飼いは一時的に牧羊業から解放される。若く単身で英語に不慣れな彼らが一時的に身を寄せるのが都市部のバスク・ホテルであった。バスやトイレなどの基礎的サービスは共用のため宿泊費が安く、バスク・レストランが併設されているため故郷の食事を堪能できることも彼らには魅力であった。

羊飼いに従事したバスク系移民の多くは、アメリカ合衆国西部滞在後数年で故地に戻る還流的移民であった。3年間の就労ビザの期限に合わせて故地にいったん移動し、その後就労のために再度帰米するという移動パターンもみられた。さらには故地とアメリカ合衆国西部の間を頻繁に移動する者もあった。こうしてヒトの移動のための初期的ネットワークが形成されるのであるが、その具体像については石井（2014）が明らかにした。

こうした移動がバスク地方とアメリカ合衆国西部という物理的に独立した2つの空間のつながりを強化した。換言すれば、2つの独立した空間は移動により連動され、移動という社会的行為が実践される単体の空間としての特徴を有するようになったのである。その際、アメリカ合衆国西部諸都市に形成されたバスク・ホテルの集中地区は、いかなる社会的文脈のもとでその空間に包摂されるようになったのであろうか。以下、カリフォルニア州南部の地方都市バーカーズフィールドとアイダホ州南部の州都ボイジーを事例に、移動により連動された社会空間におけるその意義を検証しよう（図1）。

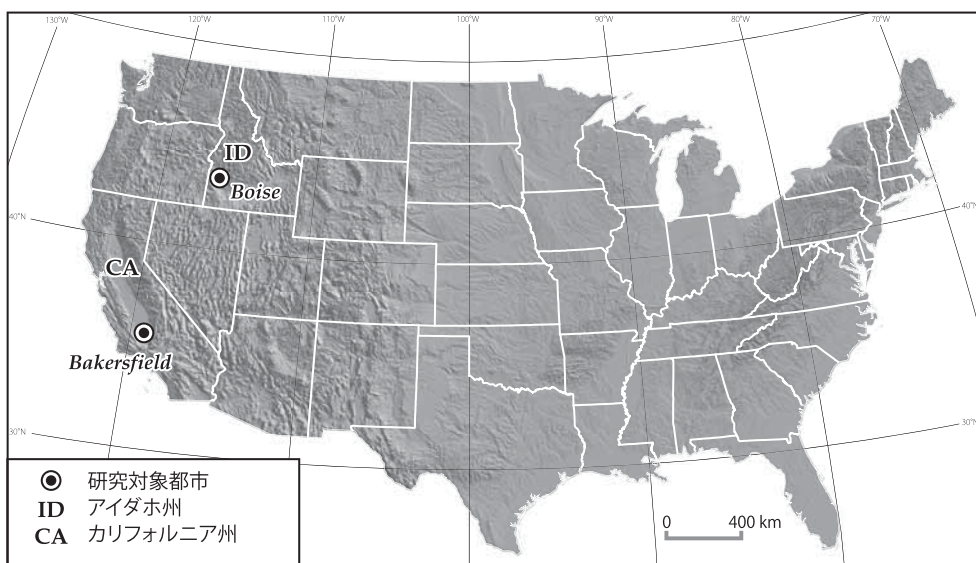


図1 研究対象都市。

3. ベーカーズフィールドのバスク・ホテル

ベーカーズフィールドは、カリフォルニア州カーン郡 Kern County の中心都市である。ここにバスク人が移住するようになったのは1870年代半ばといわれる (Paquette 1982, 33)。ベーカーズフィールドとその近郊に入植したバスク系移民は、牧羊業に従事するようになった。サンホアキン・バレー南部に位置するベーカーズフィールドは、モハーヴェ砂漠が東に広がる乾燥が厳しい土地であるが、冬季は若干の降雨により牧草の確保が可能になることから、羊飼いと羊群の冬季の滞留地になった。

羊群はベーカーズフィールド付近に滞留する冬季に子羊を産み、春になると東部のモハーヴェ砂漠へ移動し、乾燥が厳しくなる初夏にはモノ湖付近まで北上し夏をシエラネバダ山脈東部山麓で過ごし、秋には山脈を越え西のサンホアキン・バレーに入り、ベーカーズフィールド付近まで南下してくる。こうした移牧の大回遊路は、19世紀末までには形成されたとされる⁽²⁾。

この大回遊の担い手となったのがバスク系移民であった。バスク系移民は、ゴールドラッシュの19世紀半ばごろから西部の鉱山地域に入植した。ただしゴールドラッシュは長続きしなかったため、バスク系移民は牧羊業に参入するようになった。そもそも彼らは故地であるバスク地方において牧羊業の経験があったわけではないようである。初期の移民はアルゼンチン、ウルグアイなどに入植していたバスク人の再移民であり、彼らは南アメリカで牧羊や牧牛の経験を積んだとされる (Douglass and Bilbao 1975)。牧羊の経験を積んだバスク系移民は、アメリカ合衆国西部に再移民後に牧羊業に容易に参入可能であった。一部の成功者は牧羊企業を経営するようになり、バスク系移民を羊飼いとして雇用するようになった。後に現地のバスク系移民だけでは羊飼いが不足するようになり、彼らはヨーロッパのバスク地方から血縁者や同郷出身者を呼び寄せるようになった。こうしてヨーロッパのバスク地方とアメリカ合衆国西部を結ぶバスク系移民の移動のためのネットワークが形成されたのである。

バスク系移民が流入するようになった19世紀後半以降、ベーカーズフィールドにはバスク系移民の集住地区、すなわちエスニック・エンクレイブが形成されることはなかったが、バスク・ホテルが集まる地区は形成された。バスク・ホテルの集中する地区を、Echeverria (1999) は「バスク・タウン Basque Town」と呼んだが、その地区一帯をバスク関連施設が占める訳ではなく、バスクのエスニシティの存在を確認できる場所がバスク・ホテルにほぼ限定されたため、ボイジーのような例外を除いて「タウン」という言葉で代表できるか疑問である。このようにバスク・ホテルにおいてのみバスクのエスニシティが確認できる理由は、ホテルの多くがバスクの伝統的料理を提供するバスク・レストランが併設しており、さらにはバスクの伝統的球技であるペロタ Pelota の球戯場フロントン Fronton を併設するも

のもあったため、移民の生活がそこで完結する環境をホテルが提供していたためである⁽³⁾。

移民の出身地にも特徴があった。Arrizabalaga (2000, 340) は 1900 年と 1910 年のバスク系移民の諸属性を分析し、ベーカーズフィールドを含むカリフォルニア州では、フランス・バスク地方出身者と、スペイン・バスク地方でもフランスと国境を接するナバラ州北部出身者が多いと指摘している。実際に後述するバスク・ホテル経営者もほとんどがこれらの地方出身となる。

バスク系移民の活動の起点であり生活空間となったバスク・ホテルがベーカーズフィールドにおいて地理的に展開する様子を探れば、バスク系移民が生産した社会空間の一端を解明することができるであろう。したがって以下ではベーカーズフィールドのバスク・ホテルを 3 つの時間断面において地図化することを試みる。地図作成の資料として、サンボーン地図会社 Sanborn Map Co. が製作した火災保険地図を利用した。同社はベーカーズフィールドの火災保険地図を 1885 年以降複数回発行しているが、そのなかからバスク・ホテル登場以降の地理的変遷を把握しやすい 1889 年版、1912 年版、1949 年改訂版を利用して、各年の地図を作成することにした。地図で表示する地理的範囲であるが、バスク・ホテルはサザン・パシフィック鉄道のベーカーズフィールド駅南側の 6 区画に集中的に立地したので、その範囲のみを地図化することにした。同社の火災保険地図には、番地をはじめ、通りや建物の名称、建物の用途まで明記されているので、そのなかから宿泊施設に該当するものを抽出した⁽⁴⁾。ただし、すべてのホテル名や建物の用途が確認できるわけではないので、各年の住所録で番地と建物の用途を補足確認した⁽⁵⁾。また地図や住所録だけではどの宿泊施設がバスク・ホテルに該当するかまでは断定できないため、バスク・ホテルを扱った先行研究や当時の新聞などから最終的に判断した。ベーカーズフィールドのバスク・ホテルについては、地元のバスク系歴史家の Bass and Ansolabehere (2011, 2012) が詳しいので、彼らの先行研究を主に活用した。

1899 年当時のバスク・ホテルの分布図が図 2 である。表示した範囲はサザン・パシフィック鉄道ベーカーズフィールド駅の南西側、東がキング通り King St. から西がトゥーレアリ通り Tulare St. まで、北がサムナー通り Sumner St. から南がグローヴ通り Grove St. までの範囲にある 6 区画である。この時点で確認できるバスク・ホテルは、イベリア・ホテル Iberia Hotel の 1 軒のみである⁽⁶⁾。

イベリア・ホテル(図 2 中の①)はベーカーズフィールドで最古のバスク・ホテルで、創業 1893 年である。創業者はフェルナンド・エチェベリー Fernando Etcheverry とファウスティノ・ノリエガ Faustino Noriega である。エチェベリーはフランス・バスクのアルデュード村 Alududes 出身で、1890 年頃にベーカーズフィールドに移住した。彼は移住後に牧羊業に参入し、図 2 の範囲に該当する現在ではイースト・ベーカーズフィールドと呼ばれる地域に拠点のひとつを置いたが、その正確な位置は定かでない。もう一方のノリエガは、スペインのサンタンデル出身でバスク人ではない。本名もファウスティノ・ミエール

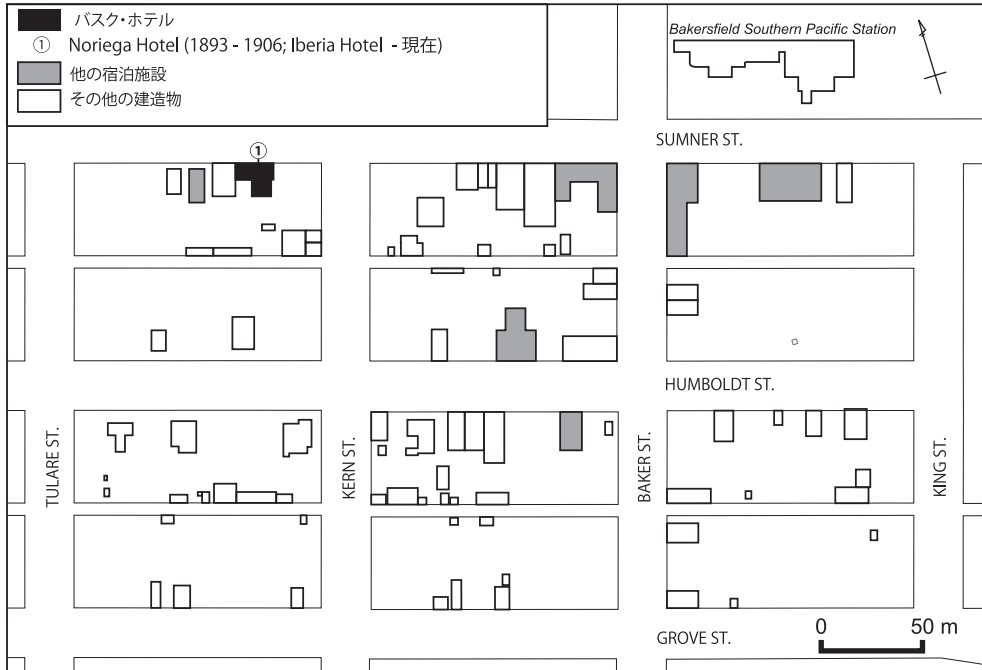


図2 ベーカーズフィールドにおけるバスク・ホテルの立地 (1899年).

出典：サンボーン火災保険地図 1899年版，住所録などの情報に基づき作成。

Faustino Mier であり，移住後にカリフォルニア州トゥーレアリ Tulare 郡在住の叔父ビンセント・ノリエガ Vincent Noriega の仕事を助けるようになって以降「ノリエガ」と名乗るようになった。ノリエガは 1893 年にフランス・バスクのアルデュード村出身のバスク人女性ルーズ・インダ Louise Inda と結婚している。1906 年にエチェベリーはホテル業から退いて牧羊業に専念するようになり，経営を一任されたノリエガは同年にホテル名をノリエガ・ホテル Noriega Hotel と改名している。その数年後にエチェベリーは同ホテルの所有権をノリエガに譲渡している。

ノリエガ・ホテルは現在も営業を続けており，アメリカ合衆国西部で営業中のバスク・ホテルのなかでは最古である (Echeverria 1999, 104)。当時ニューヨークに船で到着したバスク系移民は，大陸横断鉄道を利用してベーカーズフィールドへ移動するのであるが，英語を話すことのできない彼らは，“Noriega Hotel, Bakersfield, California” と書かれた札を首からぶら下げてノリエガ・ホテルを目指したという (Bass and Ansolabehere 2012, 68)。こうしてノリエガ・ホテルは初期のバスク系移民の間でカリフォルニア南部のランドマーク的存在となった。ノリエガ・ホテルがバスク系移民の目印であり活動拠点であったことはいうまでもないが，このホテルで従業員として働き，後に独立してホテル経営を始めるバスク人が多数排出された。このような点から Paquette (1982, 5) は，バスク人がこれ以降ベーカーズフィールドへ大量移住する間接的要因になった人物としてのノリエガの重要性を指摘

している。

1900年代に入るとバスク系移民の増加を反映してバスク・ホテルが急増する。1912年当時を確認できるバスク・ホテルの分布図が図3である。ノリエガ・ホテルは営業を続けており、新しく3軒が加わっている。

ホテル・ドゥ・ユーロップ Hotel d'Europe (図3中の②)の開業当初の所有者はフランス系のピエール・ロー Pierre Raux であり、その当時はバスク・ホテルではなかった。しかし1906年に、ノリエガ・ホテルで働いていたフランス・バスクのラス Lasse 出身のジャン・ブルベルツ Jean Burubeltz とジャンヌ・ブルベルツ Janne Burubeltz の夫妻がホテルを経営するようになって以降、バスク・ホテルとしてバスク系移民から認識されるようになった⁽⁷⁾。ジャンは1911年に他界するが、夫人のジャンヌが経営を引き継いだ。彼女は1915年に所有者のローからホテルを買い取り、1921年に閉鎖されるまで経営した。

メトロポール・ホテル (図3中の③)は1930年代まで営業していたが、いつからバスク人が経営に係るようになったかについては諸説ある。Bass and Ansolabehere (2012, 2)は1895年からバスク人がメトロポール・ホテルを経営していたとしている。しかし1899年版のサンボーン火災保険地図には別名のホテルとして記載されており、1912年版ではメトロポール・ホテルとして記載されている。ちなみに1899年版サンボーン火災保険地図では、同じ敷地のホテル名がライズ・ホテル Ray's Hotel となっている。最初のバスク人経営者は

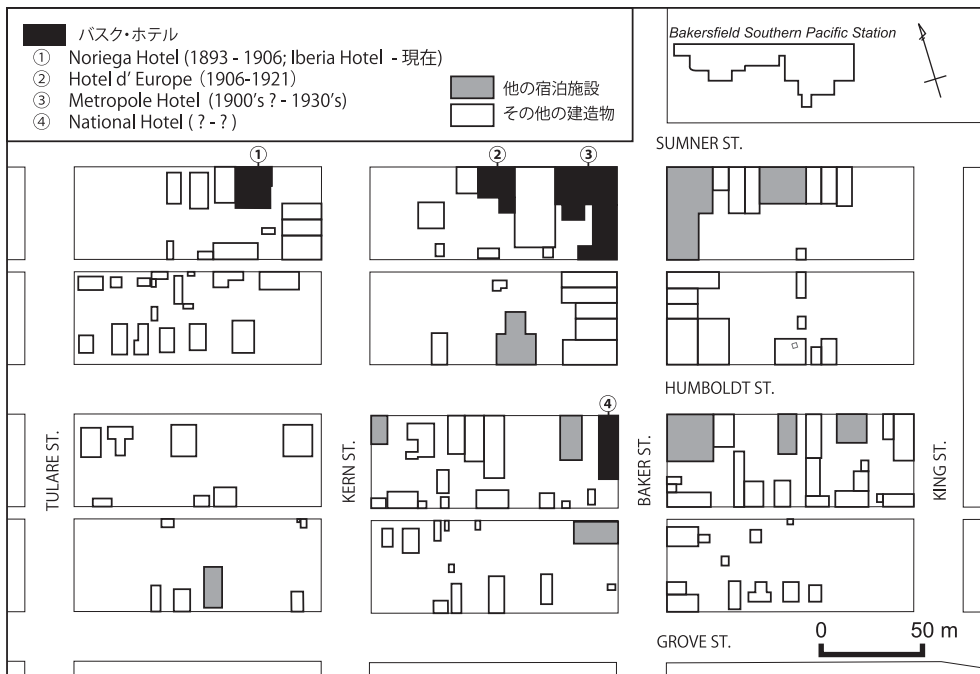


図3 ベーカーズフィールドにおけるバスク・ホテルの立地 (1912年).

出典：サンボーン火災保険地図 1912年版、住所録などの情報に基づき作成。

フランス・バスクのオジュ＝レ＝バン Ogeu-les-Bains 出身のジーン・エストリボー Jean Estribou であることは、複数の文献で一致しているので間違いはないであろう。エストリボーは1882年にサンフランシスコに、1893年にカーン郡に移住している。Morgan (1912, 1215) が当時の著名人を記した人物伝には、エストリボーが1895年にメトロポール商店を開業したという記述はあるが、ホテルの営業についての記載が一切ない。Echeverria (1999, 110) も、エストリボーがメトロポール・ホテルを経営していた時代の記録がほとんどないと指摘しており、メトロポール・ホテルの開業時期を次の経営者に引き継がれた1920年代頃と推定している。ただし1912年版サンボーン火災地図からメトロポール・ホテルが同年に営業していたことは確認できる⁽⁸⁾。おそらくエストリボーは1900年から1912年間にライズ・ホテルを入手し、メトロポール・ホテルとして営業を開始したのでであろう。その後メトロポール・ホテルは、近隣のテハチャピ Tehachapi からベーカーズフィールドに1926年に移住してきたジャック・イリアート Jacque Iriart とグレース・イリアート Grace Iriart の夫妻に引き継がれ、1930年代まで営業が続けられた (Echeverria 1999, 110)⁽⁹⁾。

ナショナル・ホテル National Hotel (図3中の④) もバスク系が経営したバスク・ホテルである。ただしそのホテルをバスク系として記述しているのは Bass and Ansolabehere (2012, 2) のみである。営業開始年も終了年も不明である。ナショナル・ホテルはベーカー通とフンボルト通りのコーナーに位置し、ピエール・サーティア Pierre Sartiat とベルナル・サーティア Bernard Sartiat の兄弟が所有した。両者はカーン郡における最も初期のバスク系移民でもある。ホテルの実質的経営者はピエールの息子ピエール・ベルナード Pierre Bernard であった。

1949年改訂版のサンボーン火災保険地図では、バスク・ホテルの数は1912年版と比較して増加はわずかにとどまっている。これは1921年と1924年に施行された移民法により、バスク地方からの移民の減少傾向が1950年代まで続いたことによる。1921年の移民法は移民の出身国別割当制を導入し、さらに1924年の移民法は割当基準をさらに厳しくしている⁽¹⁰⁾。フランス系移民の割当は厳しくなかったものの、第一次世界大戦以降フランス・バスク地方からの移民は急減している (Douglass and Bilbao 1975, 303)。

1949年改訂版のサンボーン火災保険地図で確認できるバスク・ホテルは図4のとおりである。新規に加わったのがアメストイ・ホテル Amestoy Hotel (図4中の⑤) である。もともとはセスマ・ホテル Cesmat Hotel であったが、スペイン・バスクのイルリタ Irurita 出身のフランシスコ・アメストイ Francisco Amestoy が1927年に購入し、1931年にアメストイ・ホテルと改名した。アメストイはフィリピンの砂糖キビプランテーションで二人の兄弟とともに就労した後の1904年にカリフォルニアへ移住した。その後1912年に彼はノリエガ・ホテルのメイドであったアンセルマ・バジェス Anselma Ballez と結婚し、1920年から1931年までノリエガ・ホテルの経営を所有者のノリエガから任された。さらに1931年にはノリエガ・ホテルを離れアメストイ・ホテルに移籍している。アメストイは1942年に

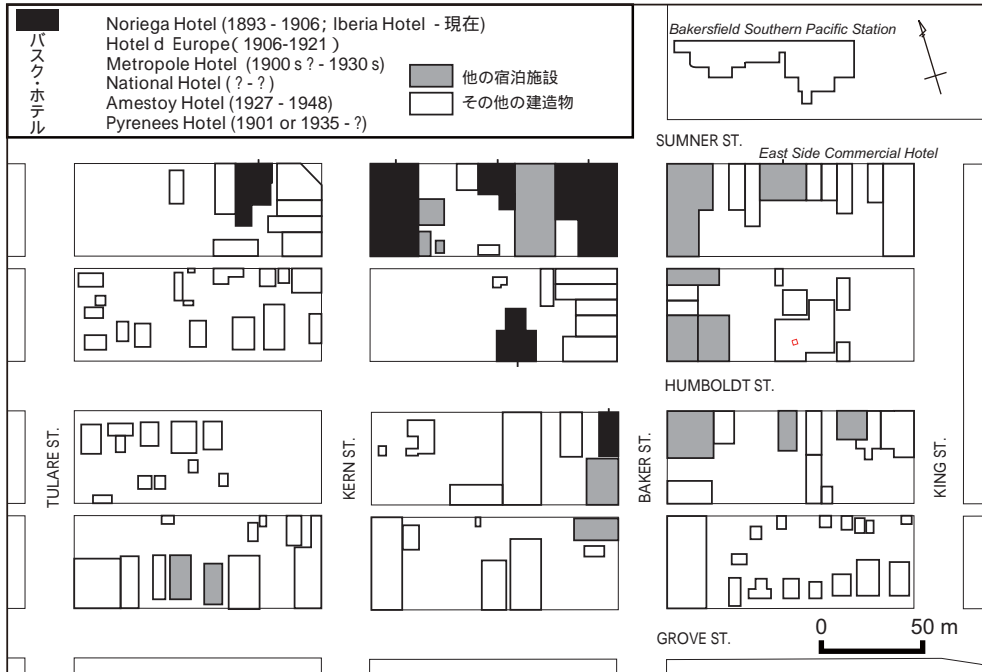


図4 ベーカーズフィールドにおけるバスク・ホテルの立地 (1949年).

出典：サンボーン火災保険地図 1949年改訂版，住所録などの情報に基づき作成。

その息子フランク・アメストイ Frank Amestoy らに経営を譲っており，息子フランクは1948年にホテルを売却している。

ピレネー・ホテル Pyrenees Hotel (図4中の⑥)もサンボーン火災保険地図 1949年改訂版で初めて確認できるホテルである。Bass and Ansolabehere (2011, 2) と Echeverria (1999, 264) は同名のホテルの開業年を1901年としているが，1912年版のサンボーン火災保険地図には記載されていない。Bass and Ansolabehere (2012, 54) と Echeverria (1999, 264) は，「ホテル建設費用が9千ドルに達したためノリエガとエチェベリーはノリエガ・ホテルとピレネー・ホテルの営業権を賃借するようになり，ブルベルツ夫妻がノリエガ・ホテルを1906年まで経営した」と，その存在を具体的に記述している。しかし Echeverria (1999, 110) も認めるように，初期のノリエガに関する資料は少なく，不明な点が多い。サンボーン火災保険地図 1912年版と文献記述の不一致はそのような理由から生じているのであろう。図4中の⑥の場所には現在ピレネー・カフェ Pyrenees Cafe が営業しているが，Zubiri (2006, 157) には，「スペイン・バスクのアリスクン Arizcun 出身のジェニー・イリバルネ・ダンス Jenny Iribarne Duns とイノセンシオ・ファレナ Inocencio Juarena が1935年に同じ場所で〈ピレネー〉と呼ばれる下宿屋を始めた」とある。おそらくこれが現在のピレネー・カフェに引き継がれるピレネー・ホテルであろう。ただしこれが1901年に創業されたとされるピレネー・ホテルを引き継いだものであることを確認できる文献がない

ので、バスク・ホテルとしての営業開始年は不明である。

図2~4ではバスク・ホテルとして示されていないものの、サザン・パシフィック鉄道ベーカーズフィールド駅の駅舎の南側にサンマー通りをはさんで対面する位置にあったイーストサイド・コマーシャル・ホテル East Side Commercial Hotel もバスク・ホテルであった(図4中に位置を明示)。このホテルはジーン・エリサルデ Jean Elizalde とグレース・エリサルデ Grace Eizalde が1920年代から1931年まで経営した。1899年のサンボーン火災保険地図にはカーン・ホテル Kern Hotel と記載されていることから、その当時のホテル所有者はバスク系以外だったのであろう。1931年にジーンとグレースはノリエガ・ホテルの経営に携わるようになったため、バスク系がイーストサイド・コマーシャル・ホテルを経営したのが1920年代から1931年までという短期間であった。そのため図3にも図4にもバスク・ホテルとして記載されていないが、一時期バスク・ホテルであったことは事実である⁽¹¹⁾。

このようにして19世紀末から20世紀前半にかけて、サザン・パシフィック鉄道ベーカーズフィールド駅前のわずか数ブロックにバスク・ホテルが集中的に立地するようになり、バスク・ホテルにより構成されるバスク系移民の特異な集住地区が形成された。この集住地区はバスク系移民がバスク・ホテルを拠点に形成した一種のエスニックな社会空間である。そして空間の核心ともいえる存在がノリエガ・ホテルであった。特にノリエガ・ホテルの営業権が賃借されるようになった1901年以降、ホテル経営に多くのバスク人が携わるようになり、後に彼らは独立して他のホテルを購入あるいは賃借してバスク・ホテルのネットワークを駅前地区に広げていった。

このようなバスク・ホテル経営者を Echeverria (1999) は「オテレロ hotelero」と呼んだ。ベーカーズフィールドにおいて彼らは、ノリエガ・ホテルを起点として、地縁ならぬ「場所の縁」ともいうべき新しいタイプの縁故をよりどころに、バスク・ホテルのネットワークを築いた。

バスク・ホテル経営者のネットワークはベーカーズフィールドに留まらない。Echeverria (1989, 310) は、彼らが血縁を利用してカリフォルニア中にバスク・ホテル経営者のネットワークを構築する様子を報告している。例えば前出のアメストイ・ホテルのオーナーであるアメストイの婦人アンセルマ・バジャスは、カリフォルニア州フレズノ市 Fresno のトマス・バジャス Tomás Ballaz の兄弟であった。イーストサイド・コマーシャル・ホテルを経営し後にノリエガ・ホテルを経営したジーン・エリサルデと、1901年からノリエガ・ホテルを経営したジーン・ブルベルツは、甥と叔父の関係であった。テハチャピでバス・ピレネー・ホテル Basse Pyrenees Hotel を経営したジーン・ピエール(注(10)で言及)はフレズノのバスク・ホテル Basque Hotel 経営者リダ・エサイン Lyda Esain の叔父であった。

バスク・ホテルの経営者らは、ベーカーズフィールドのごく限られた場所において地元在住バスク人の多様な関係に基づくネットワークを構築し、それを活用してホテル経営を展開

した。彼らがホテル業を展開したベーカーズフィールドのバスク・ホテル集中地区は、彼らの社会経済的行為により生産された一種の社会空間であったといえよう。ただしそれはそこだけで閉じられた空間ではなく、血縁や地縁のネットワークを經由してカリフォルニア全域に連動する開放系の社会空間であった。またこの社会空間は、バスク地方から移民を受け入れるために構築された社会空間であり、地縁や血縁のネットワークに根差したトランスナショナルな移動がその空間を生産したといえる。このように考えればベーカーズフィールドの駅前に構築されたバスク・ホテルにより構成される社会空間の開放性とトランスナショナル性が理解できるであろう。

4. ボイジーのバスク・ホテルとバスク・ブロック

アイダホ州のボイジーは、カリフォルニア州のベーカーズフィールドと同様にバスク人が大量に移住した都市である。ただしボイジーでは、現在でもバスクのエスニシティを都市景観において鮮明に確認できる点がベーカーズフィールドと異なる。ベーカーズフィールドでは、現在では図2~4で示した地区にノリエガ・ホテル以外にはピレネー・ホテルから転身したピレネー・カフェが残る程度で、しかもこれら施設の建物はバスク人の存在を意識させるエスニックな景観を呈していない。しかしボイジーでは、かつてバスク・ホテルが集中した地区の一区画がバスク・ブロック Basque Block として再開発されており、その一区画に入ればバスクのエスニシティの存在を実感できる。本章は、前章と同じ手続きを踏まえながらボイジーにおけるバスク・ホテルの立地をサンボーン火災保険地図と当時の住所録から明らかにすることを目的にする⁽¹²⁾。ただしその際にバスク・ホテルの歴史的展開についての記述は少量にとどめ、現在のバスク・ブロックに至る経緯の検証に重点を置く。

ボイジー付近でバスク人の活動が観察されるようになったのは1880年代末であるとされる。そのもっとも古い記録として Douglass and Bilbao (1975, 242) は、1889年にスペイン・バスク地方西部のビスカヤ出身の2人の羊飼いがアイダホに隣接するワイオミング州のジョーダン・バレー Jordan Valley で牧羊を営むようになったことを挙げている。これが後にワイオミングからアイダホにかけてのアメリカ合衆国北西部にビスカヤ出身者が集中するようになる発端であったといわれる。20世紀に入って最初の10年間に、ジョーダン・バレーで活動していたビスカヤ出身の羊飼いがボイジー近郊に進出するようになり、その結果ボイジーはバスク系の羊飼いや土地所有者の支援基地として機能するようになった。しかしボイジーに移住したバスク人は、羊飼いや牧羊業経営に従事するだけではなく、ダム建設などの建設業、鉱山採掘、さらにはそれら労働者のための宿泊業などの雑多な職業に従事し、他域に比べ職業選択の多様性に富んだ。同様に移民の出身地も異なり、前出の Arrizabalaga (2000, 340) の調査はボイジーを含むアイダホ州ではスペイン・バスク地方西部のビスカヤ県出身者が多かったと指摘している。実際に後述するバスク・ホテル経営者もほとんどがビ

スカヤ県出身者である。

サンボーン火災保険地図を利用して、ボイジーにおけるバスク・ホテルの立地展開の経緯を概観しよう。利用する地図はベーカーズフィールドと同じ年次のものが望ましいが、サンボーン火災保険地図は都市により発行や改訂の年次が異なるため、両都市の地図の発行年あるいは改訂年は一致しない。したがって図2~4になるべく近い年次である1901年版、1912年版、1943年改訂版を利用することにした。地図化する範囲は、北はパノック Bannock 通りから南はフロント Front 通り、東は5番通りから西は9番通りまでの範囲とした。同年時の住所録でホテルの所在を確認し、さらにボイジーのバスク・ホテルに詳しい Bieter and Bieter (2000), Echeverria (1999), Totoricaguena (2002), Zubiri (2006) を中心とする文献資料からホテル情報を収集した。これから登場するバスク・ホテルがボイジーに実在したものでないことは予め断わっておく。本論に登場するバスク・ホテルは、採用したサンボーン火災保険地図で所在が確認できるものにあくまで限られている。基準とした年次と営業時期が重ならないものも多数ある。

図5はボイジーにバスク人が移住するようになった初期段階の1901年当時のバスク・ホテルの分布を示している。ボイジーに入植したバスク人は、オレゴン短線鉄道ボイジー線 Oregon Short Line R.R. Boise Branch を経由して入ってきた。同線は図5中に確認でき



図5 ボイジーにおけるバスク・ホテルの立地 (1901年)。

出典：サンボーン火災保険地図1901年版、住所録などの情報に基づき作成。

るようにフロント通りの南を通りに並行して走り、旅客駅は図5西端から2ブロック西の11番通り付近に1893年に建設された。

1901年当時のサンボーン火災保険地図で確認できたのはスター・ルーミングハウス Star Rooming House (図5中の①)の1軒のみである。このバスク・ホテルを開業したのは、ホセ・ウベルアガ Jose Uberuaga とフェリパ・ウベルアガ Felipa Uberuaga の夫妻であった。ただし開業年については諸説ある。Totoricaguena (2002, 57) と Zubiri (2006, 365) は1903年としている。同様に Echeverria (1999, 168) も1903年の住所録掲載が初出としているが、営業自体はその数年前から始められていたと指摘している。実際に1901年版のサンボーン火災保険地図に掲載されており、この時点ですでに営業していたようである⁽¹³⁾。同ホテルは1970年代まで営業を続けることになる⁽¹⁴⁾。

1912年版のサンボーン火災保険地図では、確認できるバスク・ホテルが7軒に急増する(図6)。図5にも登場したスター・ルーミングハウスは、1912年版サンボーン火災保険地図でも同じ住所で掲載されている。

1912年のサンボーン火災保険地図に初出のバスク・ホテルを、営業開始年の順に紹介しよう。キャピトル・ボーディングハウス Capitol Boarding House (図6中②)はマテオ・アレギ Mateo Arregui とアドリアナ・アレギ Adriana Arregui の夫妻が1905年に開業し

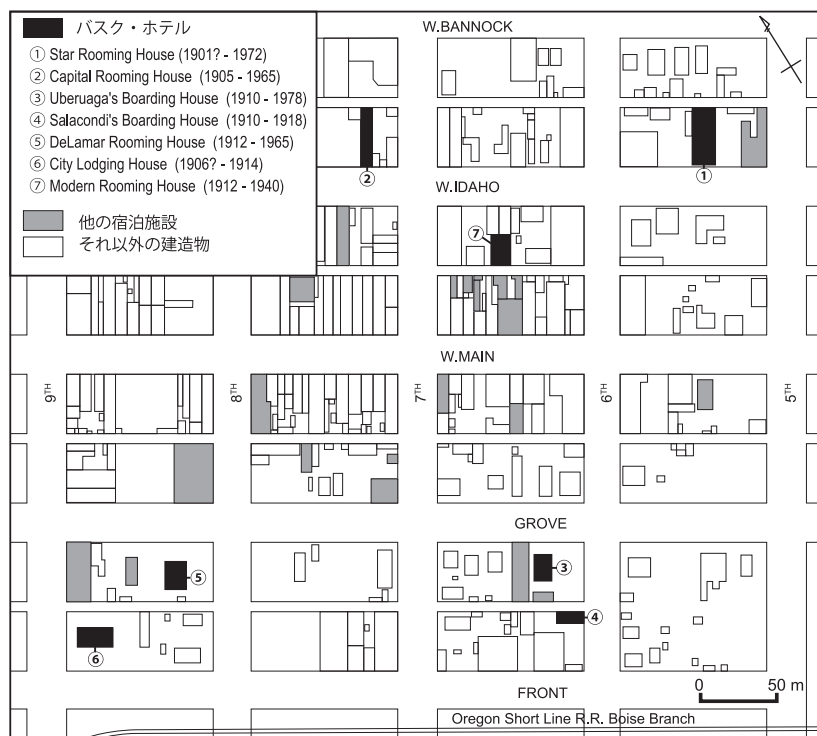


図6 ボイジーにおけるバスク・ホテルの立地 (1912年)。

出典：サンボーン火災保険地図1912年版、住所録などの情報に基づき作成。

た。アレギ夫妻は1912年までこのホテルの経営に携わったが、同年にホセ・ウベルアガ Jose Uberuaga とエルメンギルダ・ウベルアガ Hermengilda Uberuaga の夫妻にホテルを売却している⁽¹⁵⁾。このウベルアガ夫妻は、後に数々のバスク・ホテルを経営することになり、ボイジーにおけるバスク・ホテル経営の重要人物となる。

ビカンディ・ボーディングハウス Bicandi's Boarding House (図6中③)がバスク・ホテルとして利用されるようになったのは1910年のことであるが、その建物自体は1864年建造のボイジーでも最古の建造物のひとつに入る。もともとの建物の所有者はシーラス・ジェイコブ Cyrus Jacobs とメアリー・ジェイコブ Mary Jacobs の夫妻であった。ジェイコブ夫妻は1910年からバスク・ホテルとしてこの建物を賃借するようになり、ガルドス Galdos 夫妻、ビカンディ Bicandi 夫妻らに賃借されたのち、1918年からはキャピトル・ボーディングハウスをかつて経営していたウベルアガ夫妻に賃借され、最終的にウベルアガ夫妻はこのバスク・ホテルを1928年に購入している。

サラコンディ・ボーディングハウス Saracondi's Boarding House (図6中の④)は、1911年から1918年までのわずかの間ファン・ウベルアガ Juan Uberuaga とフアナ・ウベルアガ Juana Uberuaga の夫妻により経営されたが、フアンはキャピトル・ルーミングハウスの所有者ホセの兄弟であった。

デラマール・ルーミングハウス DeLamar Rooming House (図6中の⑤)は1912年からバスク・ホテルとして営業された。最初の所有者はアントニオ・レテメンディ Antonio Letemendi とレアンドラ・レテメンディ Leandra Letemendi の夫妻で、1921年に他のバスク人の手に渡って以降1973年までバスク人が営業した。

シティー・ロジングハウス City Lodging House (図6中の⑥)は、ファン・アンドゥイサ Juan Anduiza とフアナ・アンドゥイサ Juana Anduiza の夫妻が開業したが、開業年には諸説ある。Echeverria (1999, 174)は1914年としているが、Bieterら (2014, 68)は1906年開業としている。1912年版のサンボーン火災保険地図には、その住所に宿泊施設があることから、1912年当時にはすでに営業していたようである。

モダン・ホテル Modern Hotel (図6中の⑦)は、マテオ・アレギ Mateo Arregui とアドリアナ・アレギ Adriana Arregui の夫妻が1912年に開業したバスク・ホテルである⁽¹⁶⁾。その後アレギ夫妻はホテルをベントロ・ウレスティ Ventro Urresti に売却し、さらにウレスティはエウスタキオ・イスルサ Eustaquio Ysursa とギジェルマ・イスルサ Guillerma Ysursa の夫妻に売却している。そしてさらにこのホテルは、イスルサ夫妻の夫人の兄弟であるベニト・イスルサ Benito Ysursa とアスンシオン・イスルサ Asunción Ysursa の夫妻へ、さらには夫人の兄弟であるトマス・イスルサ Tomás Ysursa とアントニア・イスルサ Antonia Ysursa の夫妻へ受け継がれ、1940年まで夫妻はホテル営業を続けたとされる (Totoricaguena 2002, 251)。

ここまでの記述はホテル所有者や経営者の人間関係が大変複雑な印象を与える。しかし、

ホテルの経営がバスク系の間で受け継がれたという点では単純であり、さらに特定のファミリーの関与が強いという特徴がある。1943年のバスク・ホテルの分布図(図7)で、図6の1912年以降も営業を続けているホテルではその傾向が顕著である。スター・ルーミングハウス(図7中①)は1915年頃にウベルアガ夫妻からバスク系のフランシスコ・アギレ Francisco Aguirre とガビナ・アギレ Gabina Aguirre の夫妻に売却され、1972年までアギレ夫妻がバスク・ホテルとして営業した。キャピトル・ボーディングハウス(図7中②)は、創設者のアギレ夫妻から1912年にウベルアガ夫妻に売却され、1914年頃からはアロステギ夫妻(Jose Arostegui, Crusa Arostegui) とエペルディ夫妻(Perdo Epeldi, Marie Epeldi) の2家族が経営を引き継いでいる。ウベルアガ・ボーディングハウス Uberaga's Boarding House(図7中③)は、もともとジェイコブ夫妻の所有で、1912年には当時の経営者であったピカンディ夫妻の姓にちなみピカンディ・ボーディングハウスと呼ばれていたが、1928年にウベルアガ夫妻により購入されて以降、図7中の名称で呼ばれるようになった。このバスク・ホテルは1978年に閉業するまでウベルアガ夫妻が経営した。デラマール・ルーミングハウス(図7中⑤)の最初の所有者はレテメンディ夫妻であるが、その後の所有者や経営者についての情報は少ない。Zubiri(2006, 364)によれば、1973年に閉業するまでバスク人により経営され、最後の経営者はイラリオ・アルギンチョナ Hilario

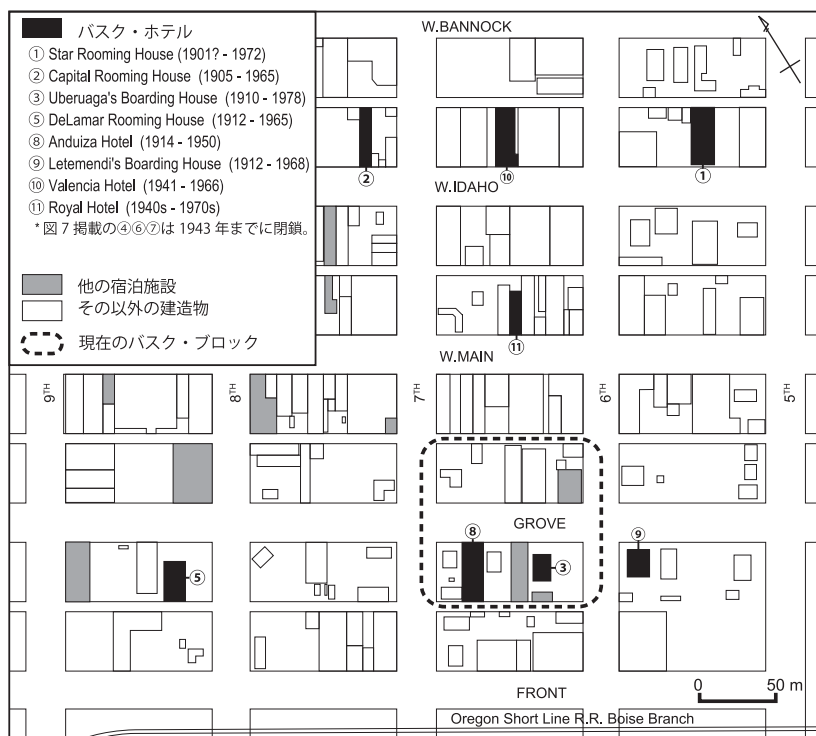


図7 ボイジーにおけるバスク・ホテルの立地(1943年)。

出典：サンボーン火災保険地図1943年改訂版、住所録などの情報に基づき作成。

Arguinchona とラウラ・アルギンチョナ Laura Arguinchona の夫妻であった。

1943年改訂版のサンボーン火災地図に初出のバスク・ホテルを概観しよう。アンドゥイサ・ホテル Anduiza Hotel (図7中の⑧)の経営者は、1912年当時に図6中の⑥のシティー・ロッキングハウスを経営していたアンドゥイサ夫妻である。このホテルはペロタ球技用の巨大な屋内球戯場フロントンを併設していたことでも有名である。Zubiri (2006, 366)は、夫妻が1912年に図7中の⑧の位置に新しいアンドゥイサ・ホテルの建物を建設したとしているが、Bieter and Bieter (2000, 57)によればフロントンでの最初の試合が1915年1月29日であったということなので、ホテルの開業は1912年から1915年の間であろう。アンドゥイサ夫妻は1950年にホテルを閉鎖するまで経営に携わった。

レテメンディ・ボーディングハウス Letemendi's Boarding House (図7中の⑨)の創業者は、1921年までデラマール・ルーミングハウス (図6中の⑤)を経営していたレテメンディ夫妻である。夫妻はデラマール・ルーミングハウスの経営を1921年に他のバスク人に譲り、1912年からは6番通りでレテメンディ・ボーディングハウスを営業するようになった。そして1939年に夫妻はグローヴ通りの図7中の位置にホテルを移転し、1968年まで営業を続けた。

バレンシア・ホテル Valencia Hotel (図7中の⑩)は、1940年までモダン・ホテルを営んでいたイスルサ夫妻がアイダホ通りの向いに1941年に開業したバスク・ホテルである。Zubiri (2006, 365)によれば、バレンシア・ホテルはバスク人以外の宿泊客にも門戸を開いていたということで、これまでのバスク・ホテルとは経営方針が異なる。

ロイヤル・ホテル Royal Hotel (図7中の⑪)は、アナスタシオ・ハジョ Anastasio Jayo とアヌンシアシオン・ハジョ Anunciación Jayo の夫妻が経営していたホテルで、ハジョ夫妻は当時5~6軒のバスク・ホテルを営んでいたようである⁽¹⁷⁾。サンボーン火災保険地図で確認できるのは、メイン通り612, 1/2番地のホテルのみである。ハジョは複数のバスク・ホテルを営むことで、多くのバスク人にボイジー滞在の機会を提供し、ボイジーのバスク系住民コミュニティの強化に貢献したとされている (Zubiri 2006, 364)⁽¹⁸⁾。

図5から図7を経年的に比較すれば、ボイジーにおけるバスク・ホテルはアイダホ通りとグローヴ通り付近に次第に集中することがわかる。特にグローヴ通り601番地にバスク・センター (図8中の③)が1949年に開設されたことは、後にグローヴ通り600番台のブロックがバスクの象徴的な空間へと変貌するきっかけになった。このブロックには、図7でも確認できるように1943年当時にはウベルアガ・ボーディングハウス (図8中の①)やアンドゥイサ・ホテルが存在し、前者はボイジーでも最古の部類に入る歴史的建造物であり、後者はアメリカ合衆国西部では最大級の屋内フロントン (図8中の②)を併設していた。これらと同じブロックに1949年にバスク・センターが建設されたことで、グローヴ通り600番台のブロックはバスク人の宿泊場兼社交場としての性格を強めた。さらに前述のような遺産的価値の高い建造物が存在するために、ボイジー歴史地区再開発の際にこのブロックではバスク

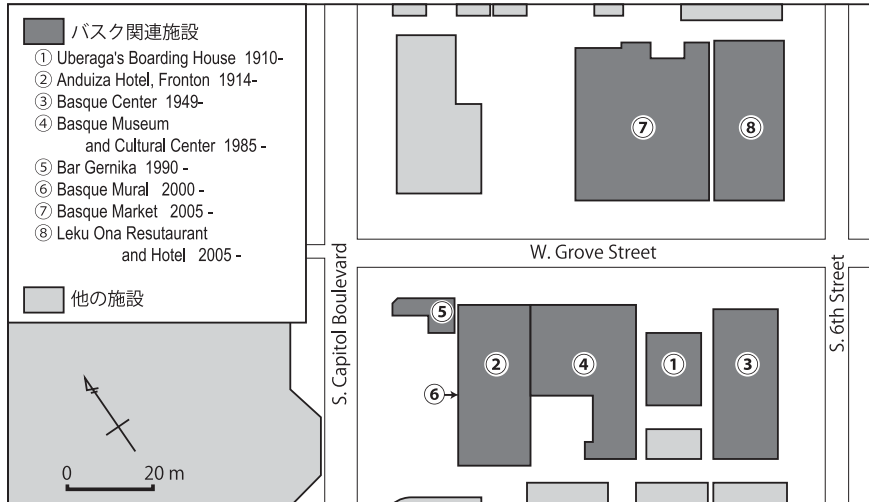


図8 ポイジーのバスク・ブロック (2013年)。

出典：現地調査により作成。

のエスニシティを前面に出した再開発が進行することになる。

図8は現在のグローヴ通り600番台のブロックを示している。同ブロックは、現在ではバスク関係諸施設が集中するため、「バスク・ブロック Basque Block」と呼ばれている。このブロックには1940年代までに前述したバスク・センターと複数のバスク・ホテルが立地し、歴史的都心地区を形成していた。この歴史的都心地区は1950年代ごろから退廃化が著しかったため、1970年代に入ると再開発が進められるようになった。再開発のために首都開発社 Capital City Development Corp.が組織され、同社を中心に再開発計画が立案された。当初の計画では、現在のバスク・ブロック付近に1980年代初期までにショッピング・モールの建設が予定されていた。しかし個人不動産所有者らから既存景観の保存と改修の要望が強まったため、1980年代半ば以降、首都開発公社は個人不動産所有者と公的機関の協調体制を築きつつ既存景観を保全改修する方針に転換した (Hill 2014, 9)。

グローヴ通り600番台のブロックの場合、バスク系住民による施設保全の動きが顕著であった。それを先導したのがアデリア・ガロ・シンプロット Adelia Garro Simplot であった。彼女は1983年にウベルアガ・ボーディングハウス (図8中の①) を買い取り、その補修を進めた。同時に彼女は非営利団体を組織し、1985年にウベルアガ・ボーディングハウスの建物にバスク博物館・文化センターを開設した (Zubiri 2006, 381)。同博物館は1993年に隣接する現在の建物 (図8中の④) に移転している。1989年にはポイジー在住のバスク系住民ダン・アンソテギ Dan Ansotegui が図8中の⑤の建造物を改修し、バル・ゲルニカ Bar Gernika を開業している。1992年には2人のバスク系住民シンプロット・オルマチェア Simplot Hormaechea とリチャード・オルマチェア Richard Hormaechea が旧アンドゥイサ・ホテルのフロントンの入っていた建物を取得し、フロントンを補修した (図8中の②)。

アンドゥイサ・ホテルは1950年に閉業し、その後オフィスに転用されていたが、フロントンは幸運にも破壊されず残されていた。建物取得に際しては、バスク・センターを拠点に活動するバスク人会 Basque Club が資金調達を援助したということである (Zubiri 2006, 367)。2000年にはバル・ゲルニカの創業者アンソテギが小売り施設のバスク・マーケット (図8中の⑦)を開業している。さらに2005年には、ミレン・アルティアック Miren Artiach とホセマリ・アルティアック Jose Mari Artiach がレクオナ・レストラン Leku Ona Restaurant and Hotel (図8中の⑧)を開業している。かつてこの場所には、バスク系のアウグスティン・ベラステギ Augustin Belastegui とペトラ・ベラステギ Petra Belastegui の夫妻が1935年から1943年まで営業したベラステギ・ホテル Belastegui Hotel というバスク・ホテルが存在した。

バスク・ブロックでは、バスクのエスニシティを象徴する施設が集中することでバスク色の強い景観が登場しているが、されにそれを強調する景観演出が施されている。例えば、フロントンの西側の壁には巨大な壁画が2000年以降掲げられており、その壁画の中にはバスク地方とアメリカ合衆国西部に展開する様々なバスクのイメージが組み込まれている (写真1)。個人所有の施設に限らず、公的な空間、例えば道路にもバスクの景観が組み込まれている。バスク・ブロックを東西に貫くグローヴ通りの路面には、バスク地方を象徴するラウブル Lauburu のイメージが組み込まれている (写真2)⁽¹⁹⁾。この景観演出はボイジー市の街路景観プロジェクトの一環であり、公道の舗装面であるため公的機関とバスク系住民コミュニティが合同で企画した。街路景観デザインの作成と実際の建設は首都開発社が担当したが、その過程にはバスク博物館、ボイジー市アート委員会 Boise City Art Commission などが加わり、2000年に完成している (Totoriguena 2000, 578-9)。

バスク・ブロックの重要性は、郷愁的な景観をバスク系住民に提供してくれるという価値のみにある訳ではない。5年ごとに開催される世界最大級のバスク・フェスティバルである



写真1 バスク・ブロックの壁画。

2013年9月13日撮影。



写真2 バスク・ブロックのグローヴ通りの舗装面に組み込まれたラウブル Lauburu.

2013年9月14日撮影.

ハイアルディ Jaialdi の会場となり、バスク系住民コミュニティの結束を世界に発信する場所となっている点でも重要である。1987年の初回と1990年の2回目のハイアルディはボイジー郊外の州立刑務所跡で実施されたが、来場者数の増加に対応するため3回目の1995年には会場を西アイダホ共進会場 Western Idaho Fairgrounds に移した。そして2000年以降は、バスク・ブロックをメインを会場として開催されている。前述の壁画とグローヴ通りの街路景観整備が2000年に完成しているのは、同年のハイアルディ開催に合わせたためである。

5. バスク・ホテルが連動するトランスナショナルな社会空間

アメリカ合衆国西部で現在でもなお宿泊機能を提供するバスク・ホテルは、ベーカーズフィールドのノリエガ・ホテルなどごくわずかしか残っていない。その原因はバスク地方からの移民が1970年代以降急減し、その結果バスク・ホテルの利用者が急減したためである。ベーカーズフィールドとボイジーでも、これまでの図からわかるようにノリエガ・ホテルを除くすべてのバスク・ホテルが1970年代までに営業を停止している。この傾向はアメリカ合衆国西部の諸都市においても同様で、1970年代までにほとんどのバスク・ホテルが営業を停止している。バスク地方からの移民の減少は、バスク地方の経済環境の改善や政治状況の安定によるところが大きい。

移民による新しいバスク人の供給が途絶え、バスク系住民コミュニティにおいても世代交代が進み現地社会への同化が進行すると、バスクのエスニシティをいかに持続しコミュニティの存続を図るかが深刻な課題になる。エスニック・コミュニティの持続戦略には様々な方法がとられる。バスク・クラブのような同人会を組織し、コミュニティの組織化を推進し組織

の強化を図ることは、典型的な持続戦略である。このような戦略が首尾よく進行した場合、彼らのエスニシティは都市景観にも表象するようになる。ボイジーのバスク・ブロックはその典型であろう。ボイジーの場合、バスク系住民がエスニック景観の再生を進める主体のひとつになっただけでなく、市当局や非政府組織も街路景観整備やハイアルディ支援などを通してエスニック景観の生産と消費に加わっている。それに対しベーカーズフィールドの場合、現在も営業を続けるノリエガ・ホテルの他にバスク食を提供するレストランやカフェが同じエリアに点在するものの、それらがバスクのエスニシティの存在を他者に認識させるほどの集合体的な存在感はない。

同じ時期にバスク・ホテルが展開した2つの場所で、その後のエスニシティの表象の程度にこれほど大きな差が生じる原因はどこにあるのであろうか。バスク人の集中度に違いがあれば、エスニシティの表象の程度にも違いは生じよう。ベーカーズフィールドが所属するカーン郡 Kern County に在住するバスク系住民は、2012年当時全米で郡別第4位の1416人、郡全人口の0.15%である。それに対しボイジーが所属するエイダ郡 Ada County 在住のバスク系住民は2012年当時全米で郡別第1位の3,095人、郡全人口の0.73%である⁽²⁰⁾。いずれも全米規模ではバスク系住民の集積地であるが、割合で見ればベーカーズフィールドのほうが低い。ただし、両者とも郡人口の1%にも満たず現地社会に強い影響を及ぼすほどの規模とは考えられない。ボイジーのバスク・ブロックのように、歴史的都心地区の一区画の再開発がバスクのエスニシティを前面に出しながら進められたケースは特異とみなしたほうがよい。

ボイジーの場合、かつてバスク・ホテルが集中した一区画の保全とエスニック景観の演出がうまくいった理由はどこにあるのだろうか。現地バスク系住民コミュニティで歴史的景観保全の意識が高まった時期と、ボイジー市当局による歴史的都心地区再開発を推進する時期が偶然一致したからであろうか。筆者が考えるに、理由はその一区画がバスク系住民の多様な社会的行為により生産された社会空間であったことにある。現在のバスク・ブロックは、かつてバスク地方から到着した移民にとって諸活動の拠点として故地との間を頻繁に往来した故地バスクとをつなぐ移動空間の結節点であり、地元在住バスク系住民にとってはバスク・ホテルを運営するためのビジネスの空間であり、なおかつ社交場であるバスク・センターのあるコミュニティ活動拠点としての空間であった。この空間でバスク人は様々な社会的活動を展開し、この空間を社会的に生産し、維持し、消費してきた。

ベーカーズフィールドの場合、バスク人会としてのカーン郡バスク・クラブ Kern County Basque Club が1944年に創設される (Bass and Ansolabehere 2012, 109)。こうした地元バスク系住民コミュニティの組織化の始まりとしては、ベーカーズフィールドのケースは南カリフォルニアでも最古の部類に入る。初期のバスク・クラブは集会のための固定的な施設は所有せず、集会会場は図2から図4の範囲で示した付近のバスク・ホテルやバスク・レストランを利用していた。この段階では移民と故地バスクとをつなぐ空間、地元在住バ

ク系住民がバスク・ホテルを経営するためのビジネスの空間、また彼らの社交場としてのコミュニティ空間が一致していた。しかし、バスク人会は1948年には市西部の旧スイス・ホールを購入してそこをコミュニティ活動の集会場として利用するようになった。バスク・ホテル集中地区の遠隔地にコミュニティの拠点が確保されたことは、バスク・ホテルの空間と社交空間の分離を意味する。さらに1974年には図2~4の地域から南南西に約6キロメートル離れた位置に現在のバスク・クラブの建物が購入されている。このようにベーカーズフィールドの場合、移民の集積するバスク・ホテル集中地区と、地元在住バスク系住民コミュニティの拠点となるバスク・クラブが1940年代末の段階で地理的に分離されてしまった。これが移民ビジネスを中心としてきたバスク・ホテル集中地区が移民減少後に衰退する要因のひとつになったことは疑問の余地がない。

バスク系住民のコミュニティ活動の拠点がエスニック・ビジネスの拠点地区と一致していたか否かが、ベーカーズフィールドとボイジーの今日のエスニシティ景観の違いの最大の原因であるといえる。換言するなら、バスク・ホテルが集中する空間の生産・維持・消費に関与した社会的行為の重層性の差とでもいえよう。

ここでボイジーのケースでさらに注目したい点がある。バスク・ブロックにおいて世界最大の国際バスク・フェスティバルであるハイアルディが5年に一度開催されるようになった経緯をZubiri (2006, 393) が説明しているが、それによれば北米バスク組織 North American Basque Organization : NABO の会合がソルトレイクシティで開催された際、会合後にNABOのボイシー代表者とバスク州政府代表者との間で交わされた会話がきっかけになっている。このような経緯からバスク政府は、ダンサーやミュージシャンをイベントに送り込むことで第1回から現在までハイアルディの運営を支援している。バスク地方からの経済的要因によるヒトの移動は途絶えたものの、ヒトの移動の時代に生産されたネットワークは維持され、移民収束後も政策的な支援の移動がそのネットワークを介して続いているのである。

こうして考えれば、アメリカ合衆国西部のバスク・ディアスポラとその故地であるバスク地方は、大西洋により隔てられた物理的には独立した空間でありながらも、バスクのエスニシティにより越境して連動されたトランスナショナルな単体の社会空間の一部であるとも解釈できる。そのトランスナショナル社会空間において、バスク・ホテルが集中した一区画は、かつてはバスク移民にとって羊飼いのビジネスの拠点であり、地元のバスク系住民にとってホテル・ビジネスの拠点でもあり、いわば越境するバスクの社会空間における結節点として機能していたといえる。そして移民によるヒトの移動が途絶えた現在、ボイジーのバスク・ブロックの場合は、それまでに生産されたネットワークを介して政策や文化活動が移動する社会空間における磁場あるいは結節点のような機能を果たし、その結果としてバスクのエスニック景観が集中的に表象するのである。

6. おわりに

バーカースフィールドとボイジーのバスク・ホテル集中地区をトランスナショナル社会空間の結節点と考えるなら、そこで重要になってくるのはバスク人が様々な社会的行為により生産した2つの結節点を結ぶネットワークであろう。Kivisto and Faist (2010) が示唆するトランスナショナル社会空間のように、「集団がナショナルな枠組みに収斂するのではなく、越境する社会関係やネットワークを介して複数のナショナルな領域をトランスナショナル社会空間において構築する」と考えれば、トランスナショナル社会空間におけるバスク・ホテル集中地区の結節点としての位置付けがわかりやすくなるであろう。バスク人は大西洋を越境する2つのナショナルな領域を生産し、ネットワークを介してそれを維持、強化したのである。

もう一つ重要なキーワードが、ネットワークをめぐる「移動」であろう。1970年代までのバスク人の移動は、故地バスクの経済環境からの脱出とアメリカ合衆国西部での羊飼い就業による経済的成功を目的とした彼らを取り巻く経済的文脈が生産したヒトの移動であった。さらにこの移動は故地の人間関係、つまり地縁や血縁といった社会的関係によって維持され強化されてきた。そのような観点から当時のバスク人の移動を定義するならば、彼らを取り巻く近代社会の文脈により意味が付与されたモダン局面の移動であったといえる。

現在、羊飼いの移動は途絶えたものの、ボイシーのバスク・ブロックをめぐるヒトや情報の移動に代表されるように、それまでの移動により生産されたネットワークを介してポストモダンな移動が維持されている。この段階における人や情報の移動は、アメリカ合衆国西部のバスク系住民コミュニティにおけるエスニシティやナショナルリティの再認識といった言説により意味を与えられたポストモダンな移動といえる。

このようなポストモダンな移動が始まった時期が、故地のバスク地方、特にスペイン・バスクにおいてバスク州とナバラ州が自治州としての行政上の自治を確立した時期とほぼ同時期である点も大変興味深い。バスク州は1979年の自治憲章であるゲルニカ憲章の成立をもって、ナバラ州は1982年のいわゆる組織法の成立をもって自治権を獲得しているが、両州が自治権を確立したこと、換言すればネイションとしての再ナショナル化を達成したことで、ナショナルな制度がアメリカ合衆国西部のバスク系住民コミュニティとの関係に主体的に関与できるようになったという点が極めて重要である。特にバスク州議会は、海外のバスク系住民コミュニティやバスク・センターとの社会的、文化的、経済的関係を強化するための諸方策を制度化して実行するための法律を1994年5月7日に可決している。それを受けてバスク州首相府には専門の部局が設置され、ボイジーのハイアルディに使節団を送る活動などをサポートしているのである。これまでに生産された社会的ネットワークを制度が強化し、その結果トランスナショナル社会空間のなかでもその強化が首尾よく進行した一部の空間で

は、バスクの再ナショナル化が進行しているのである。

こうしたネットワークの磁場のような場所はいくつかあろう。かつてヒトの移動の時代は、故地のバスク地方では各地の集落であり、そこを起点にバスク人は地縁血縁を頼りにアメリカ合衆国西部に移動した。今日のバスク地方で磁場的な場所の代表は、バスク政府であろう。政府とその諸機関はかつてのネットワークを制度的に強化することを試みている。かつてのアメリカ合衆国西部ではバスク・ホテルであり、それが集中する一区画であった。そこを拠点にバスク人は経済活動を展開し、故地との間を往来した。後にバスク・センターが各地に創設され、コミュニティの結节点的機能はそちらに移るが、ボイジーのようにかつてのバスク・ホテル集中地区にバスク・センターが立地するといった好条件がそろう場合には、その一区画はバスク人の移動の記憶が複雑に交差する象徴的な場所となり、景観の再ナショナル化が進行したのである。

*本稿執筆に際しては、平成 26 年度科研費基盤研究(A) (研究代表者：矢ヶ崎典隆，課題番号：23251002) と、平成 26 年度科研費基盤研究(C) (研究代表者：石井久生，課題番号：24520898) の一部を使用した。現地調査に際して、ボイジー市のアイダホ州公文書館とバスク博物館・文化センターの諸氏、ペーカーズフィールド市のペーカーズフィールド歴史協会とビール記念博物館の諸氏には数々の便宜を払っていただいた。ここに記して御礼申し上げます。

〈註〉

- (1) アメリカ合衆国センサス局の American Community Survey の 5 年推計値によれば、2012 年時点のバスク系住民の推計値は 56,226 人である。それに対して同時期の日系は 794,441 人 (Asian alone by selected groups, Japanese に該当) に達する。
- (2) 当時の羊群の大回遊については斎藤 (2014) が詳しい。
- (3) ペロタはバスク語でピロタ Pilota と呼ばれるが、スペイン語やフランス語のペロタ Pelota が英語にそのまま転用されているので、ここでは「ペロタ」の用語を用いる。球戯場もバスク語ではフロントイ Frontoi と呼ばれるが、スペイン語の Frontón あるいはフランス語の Fronton がそのまま英語に転用されているので、ここでは「フロントン」をそのまま用いる。
- (4) サンボーン火災保険地図は、ビール記念図書館 Beale Memorial Library 所蔵のマイクロフィルム版を利用した。この地図では、大規模なホテルについてはホテル名がそのまま記載されているが、小規模な宿泊施設については単に Hotel と記入されているものが多い。ただし Hotel と記入されている建物のみが宿泊施設ではない。したがって当時の宿泊施設を表現する用語である Boarding house, Furnished room, Rooms などが記入された建物は、すべて宿泊施設と判断した。
- (5) 住所録はサンボーン火災保険地図と同様にビール記念図書館所蔵のもの、ただし冊子版を利用した。住所録は参考文献末尾に記載した。
- (6) この 2 軒以外にもバスク系のホテルが存在した可能性がある。ひとつはピレネー・ホテル Pyrenees Hotel である。Morgan (1914, 1191) はエチェベリーが「1894 年にサンマー通りのピレネー・ホテルの所有者になった」としているが、しかしこれが事実であることを確認するのは困難で、Zubiri (2006, 155) はイベリア・ホテルと同じ敷地内で営業していた可能性もあるとしている。もうひとつが 1899 年と 1912 年のサンボーン火災保険地図のフンボルト通り 631 番地 (631 Humboldt Street) に記載されたフレンチ・ホテル French Hotel である。同じホテルの名称がフランス系のホテルとして Bass and Ansolabehere (2011, 3) に登場するが、そこに

記載された番地が地図中の番地と異なる。フンボルト通り 631 番地と一致するホテルとして文書で確認できるのは、ベーカーズフィールド市議会 1921 年 2 月 14 日通常議会議事録に登場するプランティエ・ホテル Plantier Hotel である。その議事録中の「下宿譲渡許可 Rooming House Permit Granted」として、「ボーマン議員の動議とレンフロ議員の賛成により、フンボルト通り 631 番地のプランティエ・ホテルをオリビエール氏 A. Olivieri とシネリ氏 Joe Cinelli へ譲渡することを許可する」という記述がある。少なくとも 1921 年の時点ではイタリア系の 2 名に営業権が渡ったようである。1921 年以前の所有者については地元紙 *The Bakersfield Californian* の 1940 年 5 月 21 日版の訃報に、「アリウス・プランティエ M. Arius Plantier は羊飼いのパイオニアで、地元病院にて本日死去した。プランティエはフランスのオルシエ Orcie (フランス東部のオート＝サヴォア県の村：筆者加筆) 出身で、59 年前にベーカーズフィールドへ移住し、現在のイースト・ベーカーズフィールドにてプランティエ・ホテルを創業した。同ホテルはカーン郡の初期の羊飼いの本拠地になった。プランティエはホテルを営業するかたわら牧羊業を営み、カーン郡の大規模牧羊家として長いこと知られた」とあることから、フランス系ホテルであったことがわかる。別の文書には、フランス南東部オルシエール Orcières 出身のジョセフ・ブレッソン Joseph Bresson がカーン郡で羊飼いとして働いた後に 5 年ほどプランティエ・ホテルに従業し、1913 年 5 月にユニバーサル・ホテル Uuniversal Hotel を購入した、という記述がある (Morgan 1914, 1297)。おそらくサンボーン火災保険地図に登場するフレンチ・ホテルは、プランティエ・ホテルに引き継がれる以前のフランス系ホテルであろう。この時期のサンホアキン・パレーには、バスク系以外のフランス系、特にアルプス出身者も入植し、当初は牧羊業を営んでいた。しかし 20 世紀に入ると南カリフォルニアでの人口増加による酪農製品需要の増加に対応してフランス系 (フランス・バスク出身者を含む) の多くは牧牛業に転身していった (Douglass and Bilbao 1975, 303)。

- (7) Morgan (1912, 1335) は、1911 年以降ブルベルツがホテルの経営者であるとしている。それに対し Echeverria (1999, 107) は、ブルベルツ夫妻が 1901 年にホテルを賃借し実質的に経営するようになったとも記述しているが、その情報について本人も不確かであるとしている。Echeverria (1999, 107) も Bass and Ansolabehere (2012, 3) も、ブルベルツ夫妻が 1906 年までイベリア・ホテルを経営し、同年にホテル・ドゥ・ユーロップに転籍したとしているので、1906 年以降同ホテルの経営に携わったことには間違いない。
- (8) 1912 年の住所録でもメトロポール・ホテルの存在が確認できる。しかし 1899 年版住所録には同ホテルは記載されていない。
- (9) 1942 年 7 月 21 日の地震によりメトロポール・ホテルの建物は全壊したが、すでにその当時バスク人によるホテル経営は終了していた (Echeverria 1999, 112)。
- (10) 1921 年移民法は、1910 年センサスの出身国別人口比率をもとに移民割当を算出していたが、1924 年移民法は、南欧や東欧からの移民がまだ少なかった時代の 1890 年センサスの出身国別人口比率をもとに移民割当を適用した。そのため南欧のスペインには厳しい割り当てが課され、結果的にスペイン・バスクからの移民は急減した。
- (11) 図の地理的範囲から外れるために本稿に記載していないバスク・ホテルもある。例えば 19 番通りと M 通りにはベーカーズフィールド種苗店の上階でオキシデンタル・ホテルが営業していた (Bass and Ansolabehere 2012, 65)。同ホテルはバスク人のジーン・ピエール・マルティント Jean Pierre Martinto により経営されていた。1910 年代そこはアルコールを提供するサロンであったが、1920 年の禁酒法により、マルティントとその両親が経営する種苗店となった。マルティントは兄弟のジーン・フェルミン Jean Fermin とジーン・ピエール Jean Pierre のもとで牧羊に従事するために 1888 年にカーン郡に移住した。兄弟のジーン・ピエールは 1895 年にテハチャビにおいてホテル経営で成功した人物でもある。
- (12) ボイジーのサンボーン火災保険地図は、アイダホ州公文書館からアクセスして入手した PDF

ファイル版の地図を利用した。住所録はアイダホ州公文書館所蔵のものを利用した。

- (13) Bieter and Bieter (2000, 44) には、「1901年にホセ・ウベルアガがシティー・ロッキングハウスを開業した」とある。おそらくこれがスター・ルーミングハウスなのであろう。
- (14) Zubiri (2006, 362) は、1900年頃にアントニオ・アスクエナガ Antonio Azcuenaga が開業したオレゴン・ホテル Oregon Hotel が、ボイジーで最初のバスク・ホテルであるとしている。このホテルについては Echeverria (1999, 168) も最初期のバスク・ホテルとして言及している。しかし1901年版のサンボーン火災保険地図では、Echeverria が指摘するフロント通りと9番通りの交差点に宿泊施設は見当たらず、住所録にも登場しない。存在が確認できないので、本稿から省いている。
- (15) 夫のホセの名前はスター・ルーミングハウスの所有者と同一であるが、別人であろう。Zubiri (2006, 365) も2人のホセは同一人物でないとしている。
- (16) Echeverria (1999, 174) は1915年開業としているが、それはおそらく所有者が交代した年であろう。Totoricaguena (2002, 251) は1912年、Zubiri (2006, 363) は1912年ごろとしているうえ、1912年版サンボーン火災保険地図にもこの宿泊施設が登場しているので、1912年で間違いないであろう。
- (17) Echeverria (1999, 179) は5軒、Zubiri (2006, 364) は6軒としている。
- (18) これら以外にも、1943年改訂版のサンボーン火災保険地図では、メイン通り716, 1/2番地のデルリオ・ホテル Del Rio Hotel が存在したという住所に宿泊施設が確認できる。同ホテルは、イポリト・サバラ Hipólito Sabala とマリア・サバラ María Sabala の夫妻が1950年代に開業したとされる。複数文献でそう指摘されているので、開業時期に間違いはないであろう。1943年当時おそらくバスク人以外が経営しており、その宿泊施設を1950年代にサバラ夫妻が賃借あるいは購入したのであろう。デルリオ・ホテルはその後デパートの敷地拡大を受けて、グローヴ通り910番地に移転され、サバラ夫妻が1969年まで経営した。
- (19) Lauburu とはバスク語で Lau 「4つの」Buru 「頭」を意味する。起源は諸説あるが、16世紀ごろには民家や家具調度品に組み込まれるシンボルとして多用されるようになった。
- (20) ちなみに全米第2位はカリフォルニア州のロサンゼルス郡で2,459人であるが、同郡は人口規模が大きいので、郡人口に占める割合は0.02%に満たない。全米第3位はネヴァダ州西部のワシヨー郡の2,232人で、郡人口の0.44%である。ワシヨー郡の中心都市はリノ Reno であり、同市のネヴァダ大学には全米最大規模のバスク研究センターがある。

参考文献

- Arrizabalaga, M. -P. 2000. "Les Basques dans l'Ouest américain, 1900-1910." *Lapurdum* 5: 335-350.
- Bass, S. and G. Ansolabehere 2011. "Kern Country Basque Owned or Operated Hotels and Boarding Houses." *Quarterly Bulletin Historic Kern* 61(1): 1-7.
- Bass, S. and G. Ansolabehere 2012. *The Basques of Kern County*. Kern County Basque Club.
- Bieter, J. and M. Bieter 2000. *An Enduring Legacy: The Story of Basques in Idaho*. University of Nevada Press.
- Bieter, J., J. Ysursa and D. Lachiondo, eds., 2014. *Becoming Basque: Ethnic Heritage on Boise's Grove Street*. Investigate Boise Community Research Series, vol. 6, Boise State University.
- Echeverria, J. 1989. "California's Basque Hotel and Their *Hoteleros*." In W. Douglass ed., *Essays in Basque Social Anthropology and History*, University of Nevada Press, pp. 297-316.
- Echeverria, J. 1999. *Home Away from Home: A History of Basque Boardinghouses*, University of Nevada Press.
- Hill, G. 2014. "Production of Heritage: The Basque Block in Boise, Idaho." *Basque Studies Consortium Journal*, 1(2): 1-22.

- Kivisto, P. and T. Faist 2010. *Beyond a Border: The Causes and Consequences of Contemporary Immigration*. Sage.
- Morgan, W. 1914. *History of Kern County, California, with Biographical Sketches of the Leading Men and Women of the County Who Have Been Identified with its Growth and Development from the Early Days to the Present*. Historic Record Company, Los Angeles.
- Paquette, M. 1982. *Basques to Bakersfield*. Kern County Historical Society.
- Toticaguena, G. 2000. "Celebrating Basque Diasporic Identity in Ethnic Festivals: Anatomy of a Basque Community: Boise (Idaho)." *Revista Internacional de Estudios Vascos*, 45(2): 569-598.
- Toticaguena, G. 2002. *Boise Basques: Dreamers and Doers*. Coleccion Urazandi Bilduma 3, Servicio Central del Gobierno Vasco.
- Toticaguena, G. 2005. *Basque Diaspora: Migration and Transnational Identity*. Center for Basque Studies, University of Nevada.
- Zubiri, N. 2006. *A Travel Guide to Basque America: Families, Feasts, and Festivals*. 2nd edition, University of Nevada Press.
- 飯田耕二郎 2006. 「ホノルルにおける日本人旅館の変遷 (一)」『大阪商業大学商学史博物館紀要』8: 65-110.
- 飯田耕二郎 2007. 「ホノルルにおける日本人旅館の変遷 (二)」『大阪商業大学商学史博物館紀要』9: 153-165.
- 石井久生 2014. 「バスク系羊飼いによるバスク地方とアメリカ合衆国西部間の移住行動——ナバラ州バスタンの羊飼いの事例」『共立国際研究』31: 37-61.
- 斎藤 功 2014. 「カリフォルニア州カーン郡における羊の長距離移牧の継続」『地理空間』7(1): 3-31.
- 広田康生 2013. 「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブの諸仮説」『専修人間科学論集社会学篇』3(2): 71-80.
- 藤原法子 2011. 「移民宿にみる都市横浜——1950年代の移民宿を中心とする移動の拠点の一位相」『専修人間科学論集社会学篇』1: 157-162.
- 藤原法子 2012. 「回路的世界を繋ぐ装置としての「移民宿」——横浜/ホノルルを繋ぐ移動の経験の記憶」『専修人間科学論集社会学篇』2: 155-167.

住 所 録

- Bakersfield and Kern City Directory*. 1899. A. Marks, E. Weston and R. Cooper.
- Bakersfield City Directory*. 1912. Polk-Husted Directory Co.
- Bakersfield City Directory*. 1949. R. L. Polk & Co.
- Farr & Smith's Boise City and Ada County Directory*. 1901-1902. Farr & Smith.
- Polk's Boise City and Ada County Directory*. Vol. VIII, 1912-1913. R. L. Polk & Co.
- Polk's Boise City Directory*. 1943. R. L. Polk & Co.

Basque Boardinghouses as Nodes
in a Transnational Social Space in the American West:
Cases of Bakersfield and Boise

Hisao Ishii

Basques migrated to the American West from the second half of the 19th century mainly as sheep herders. When they arrived at ultimate destinations, at first they got their accommodation in Basque Hotels. Basque Hotels were operated by Basque pioneers, and almost all of employees, such as hotel maid, cooks and waiters, were Basque immigrants. Newcomers from Basque Country scarcely spoke English, but in the Basque Hotel they could start new life without difficulty. In those days, Basque Hotels functioned as nodes in their arriving locations in the immigration network between the place of origin and that of destination. Basque Hotels were concentrated in a particular area of each principal Western city. In a case of Bakersfield, Southern California, Basque Hotels were constructed in blocks close to the Bakersfield Southern Pacific Station. Also in a case of Boise, Idaho, Basque Hotels were built over some blocks near the Oregon Short Line R. R. Station. By the 1970s, almost all of the Basque Hotels were closed in both cities because of the sharp decline of new immigrants from the Basque Country. As a result, in Bakersfield, Basque Hotel blocks experienced severe deterioration, and nowadays only some buildings retain the atmosphere of those years. In contrast to Bakersfield, a core site of Basque Hotel concentrated area in Boise was renovated as an iconic and representative place, "Basque Block." In the Basque Block in Boise, Basque ethnicity is clearly visible in the landscape as Basque mural, Fronton court, Basque museum, and so on. The case of Boise's Basque Block is a product of constant effort by Basque descendants, keeping personnel and informative mobility between the Basque Country, in spite of altered style of the mobility conducted in the modern phase. In conclusion, it is possible to define that Basque Hotels have kept functioning as nodes in the Basque transnational social space which connects two physically separate spaces, encouraging Basque nationality and ethnicity.